

なくそう貧困。命の水を！

アジアネット

JAFS

NEWS & REPORTS 2018年春

133



特集 経済発展の陰で—
模索するインドネシア



since 1979
公益社団法人アジア協会アジア友の会
Japan Asian Association & Asian Friendship Society

JAFS

● 目次 ●



「巻頭言」40周年記念 映画「セカミズ」 02

特集＝経済発展の陰で模索するインドネシア

 マングローブよ甦れ 04・05

 緑の防災、次の世代へ—環境教育 06

 危機に立つ水辺に豊かな命を再び 07

 支援学校・孤児院に光を 08・09

 学び「続ける」カンボジアの里子たち 10・11

 2小学校の校舎建設にも協力 11

 ネパールの人々の食生活を見守って 12・13

 インドの無医村に病院ができた 14・15

 JAFSからのお願い・お知らせ 16・17

 井戸寄贈報告 18～22

「忘れない」優しさこそ...熊本地震から2年 23

「JAFSプラザ」=国内の活動 24～27

「人は宝」—末広真樹子さんが卓話／間伐材から椅子・机つくって井戸10基寄贈／何故にあなたは存在するのかを学ぶ／アジアの音楽と食の融合ライブ 他

 新入会員紹介・領収報告 28・29

 「新・The 社会貢献」法人紹介 30

 「環境コラム」 31

巻頭言

私は1988年に入会し、今年で30年になります。JAFS 2代目の横井克己会長を通じての入会です。当時、横井さんは私の経営する会社の顧問であり、月1回ほど将棋を指しながら経営について話しておりました。その折にJAFSに勧誘いただき、入会しました。当時のJAFSのポスターで、女の子が天秤を担いで片道4時間かけて水くみをしている写真に感動したのも、入会のきっかけでした。当初は入会したものの、特に活動はしていませんでした。

あるとき横井さんと経営相談していると「明日からフィリピンに行く」と。私は「暑いのに」と言うだけで、なぜ行くか聞きませぬ、その場限りで話は終わりました。そして2000年、横井さんが逝去。07年頃から時間があったらJAFSに顔を出すようになっていた私は、村上公彦局長からJAFS パンダン水道プロジェクトを描いた本「マロンパティの精水」(PHP)を手渡されました。出張時の新幹線で一気に読みきると涙があふれました。横井さんのお元気な時の姿が浮かびました。パンダン水道プロジェクトは横井さんが推進していたのです。

40周年記念 映画「セカミズ」



湯川 剛
アジア協会アジア友の会 副会長

「あの日フィリピンに行くと言われたのはこのプロジェクトのためだったのか。横井さんはこんな素敵な人だ」と驚き、あの日が懐かし、そして自分の対応がなんと無神経だったのかと思えました。横井さんがJAFSの「なくそう貧困。命の水を！」の活動と出会わせてくれたのだと感じました。

その夜、風呂に入りながら考えました。なぜ自分の手元にこの本が来たのだろうか。あの日もと誘ってもらっていたら、フィリピンに行こうとしたかもしれない。今まで知らずにいたが、横井さんの水道プロジェクトが本になり、学校の教科書にも載っている、形になり残っているんだと感銘を受け、映画好きの私は「これを映画にするぞ」と思いました。私はいつも「やれないかな↓やれるかな↓やろ」の三段論法です。意志が弱いから有言実行。これまで自分の会社についても「ビル

アジア協会アジア友の会とは

アジア18カ国に井戸を贈る国際協力団体(NGO)です。1979年に大阪で設立。誰もが生まれてきて良かったと思える社会を目指し、井戸建設(累計1898基)や植林(累計250万本)、子ども教育支援を中心に活動しています。

全国都道府県認可の社団法人取得第1号団体です。2012年4月1日からは、内閣総理大臣の認定を受け、公益社団法人になりました。

海外との交流・協力活動は、インド、インドネシア、バングラデシュ、タイ、マレーシア、フィリピン、スリランカ、ネパール、韓国、カンボジア、シンガポール、ミャンマー、ラオス、中国、ベトナム、モンゴル、パキスタン、アフガニスタン、さらに西アフリカのブルキナファソにも広がり、友情のネットワークが形成されています。

日本国内でも、各地でチャリティープログラム、自然環境プログラムなどを行っています。

※ホームページ <http://jafs.or.jp>

本会へのご寄付は、寄付金控除の対象です

JAFSは内閣府より公益社団法人としての認定を受けています。JAFSへの寄付金や会費(社員会費は除く)は、申告によって、所得税、法人税、相続税について税制上の優遇措置(寄付金控除)を受けることができます。

確定申告の際、税額控除、所得控除のいずれか有利な方を選択できます。本会発行の領収書を添付して申告してください。法人税は損金の額に算入することができます。相続税は最寄りの税務署などにお問い合わせください。

を建てるぞ」「上場するぞ」と宣言し自縛自縛して実行してきました。今回の映画を製作することもJAFSの会合で宣言しました。

しかし映画製作にはまず資金が問題です。そこで「資金計画10ヶ年」としました。その間「マロンパティの精水」の著者である小嶋忠良さんとも出会い、映画化の許諾を得ました。19年のJAFS 40周年に合わせた映画の完成を、16年頃から目指しています。プロデューサー、監督、脚本家も決まりました。資金は私の自費のみと知って、赤井英和さん、橋本マナミさんなどのキャストも、多くが友情出演してくださるようになりました。4月からフィリピンの撮影に入り、19年5月に公開予定です。映画のタイトルは、「セカイイチオイシイ水」。

多くの方に観てもらいたい。横井さんの思いを映画に載せて、後世に残したい。水の大切さ、地球とのつき合い方、戦争はいけないこと、国境を越えた人のつながり、多くのこととをこの映画は伝えてくれます。

JAFS 会員綱領

私たちは、世界の平和と人間の基本的人権を守るために人々との「友情と信頼」に基づく「理解と協力と連帯」の輪をアジアと世界に広げます。

かかる目的をもって私たちJAFS会員は以下のことに努めます。

- 一、より人間らしい地球社会の創造をめざします。
- 一、アジアと世界の人々の幸せに奉仕します。
- 一、地球の自然環境を大切に守ります。
- 一、生活の無駄を省き、地球資源を大切にします。
- 一、これらの奉仕活動を通して、自分と他人の生命の価値を高めます。

以上



インドネシアでは2005年以降、資本投資の誘導で急激に都市化と消費経済が広がりました。現在では1人当たりのGDP（国内総生産）が3千ドルを突破しています。開発が進んだ結果、沿岸部ではマングローブ林が半減し、農村部では地域格差の問題が噴出するなど陰の部分も広がっています。ここにJAFSとの連携で光を差し込む道筋が築かれようとしています。地域を良くする暮らしを求めて、環境整備と教育による次世代育成を目指しましょう。



広場の墓地に手合わせる

「インドネシアへマングローブ植林に行きませんか？」昨春秋、そんなお誘いを受けました。JAFSのワーク

マングローブよ甦れ

植えた苗が倒れないように支柱に固定する。1月11日、バンダ・アチエ、アルー・ナガ村

津波を防いで漁場を育てる

キャンプ。何と久しぶりのことでしょう。「私でも大丈夫？」と聞く前に、我が心の方が「行ってみよう」と答えていたようです。

1月9日晚、インドネシアのバンダ・アチエへ出発しました。翌10日夕、空港にAFS（アジア友の会）アチエのウイナとメックス姉弟のお出迎えを受けました。その晩からは彼らの家でお世話になるのです。家までの道すがら、記念碑と公園があります。04年12月、インドネシア海岸沖約300kmで起きたマグニチュード9.1の地震は津波を発生させ、28万人以上の死傷者と被害をもたらしました。公園の広場は墓地となっています。緑で覆われた

その下に、どれほどの方が眠っておられるのでしょうか？その時のすさまじい状況がしのばれ、思わず手を合わせました。

体を張った授業に感動

一夜明けた11日は朝から、マングローブ苗木500本を植えるワークです。アチエの大学生と聴覚障害を持つ人たちも加わって総勢60人ほどが集まり、作業に取り組みました。

マングローブは海水と淡水が混ざり合う所を好み、大河の河口は最適とか。しかし、泥に覆われた海岸・河口の作業は慣れない者には大変です。借りた長靴は少し立ち止まっていると、

泥の中へズブズブ入り込みます。時には片足持ち上げるのに助けが必要となります。悲鳴あり、笑い声あり、手を取り合って助けあい、それでも見事にひっくり返った方が約一人！炎天下とはいえ、楽しいワークとなりました。

この500本もいざ立派な大人に成長して津波や強風の防御に役立ち、広がった根元はエビ・カニを育て、人々の生活に寄与することでしょう。

ただ、若い世代の多い国です。津波を知らない子どもたちに、その恐ろしさ伝えてゆく必要を説く人たちもいて、立派に活動しています。新設の小学校へ出かけました。1年生から4年生の授業を拝見。子どもたちのキラキ

ラした目がこちらを見つめます。「マングローブはどんな木か」「マングローブはどんな風に人々の役に立っているか」を教えます。写真を見せ、絵を描き、色紙で貼り絵を作り発表させます。スクラムを組んだ3〜4人のマングローブ役の生徒に、少し離れたところから真正面に突進する津波役の男子。津波はマングローブに邪魔されて超えることができせん。体を張った授業は印象的で、感動しました。

また訪れる日を願って

アチエはそんなに大きな町ではありません。でもやはりここにも伝統の文化があります。滞在最後の日、カルチャー・ナイトではマングローブ植林に関わった大学生たちが多数集まりました。民族衣装の女学生が8人、並んで座り音楽に合わせて踊り、また男子学生の踊りは非常に勇壮でどちらも素晴らしい、本当に引き込まれました。もう、ワールド・フェスティバル”というのがあれば、ぜひ参加を勧めたいと思います。

楽しい時間はアツと言う間に去って行くものです。滞在中お世話になったご家族のワティ母さん、ウイナ、メックスとサラに心より感謝をし、14日朝にバンダ・アチエを離れました。またいつか訪れる日があることを願って、そして500本のマングローブに会うために。（JAFS会員 澤智子）

緑の防災、次の世代へ

地域・学校と協力し環境教育

A F Sアチエ シャフウィナ

アチエの沿岸部は2004年12月26日、マグニチュード9.1の地震で破壊されました。現在は一見、津波の影響から回復しているように見えます。しかし将来の持続可能な強い地域づくりのために、環境整備や、次世代への継承、人々の強い絆をつくるプログラムが必要で、津波で破壊された地域でのマングローブ防災林事業は05年、A F SアチエとJ A F S緊急支援チームの共同事業として始まりまし

林と次の世代への環境教育が提案されました。早速、プログラムをスタートすべく18年1月、沿岸のアルー・ナガ村でワークショップをしました。最初の第一歩として500本を植林し、アルー・ナガ72国立小学校で環境教育ワークショップを行いました。

今後は地域の人々とともに、沿岸の保全、沿岸部の強い共同体づくり、次世代への継承を目指し、

1. アルー・ナガ村でマングローブ防災林植林
 2. マングローブと津波防災について学ぶ、学校でのワークショップ
 3. 一般向けのセミナー
 4. 植林ワークショップ
- ご協力とワークショップへの参加を
お願いいたします。

(翻訳：J A F Sスタッフ

永井博記)



マングローブ林の植物の葉っぱ、幹、根っこなどについてワークショップで学ぶ小学生=1月12日、バンダ・アチエ、アルー・ナガ村

た。その後、06年からJ A F Sの柴田俊治元会長からの資金提供もあり、09年まで続けられていました。被災の中心地になったダヤ・バロ村のジョン村長の指導の下、防災林とマングローブ魚付き林(命のゆりかご)を応用したエビ養殖池の再生モデル作りが進められました。このエビ養殖池作りは国のモデルになり全国に波及していきまし

た。また再び津波が来た時の避難ビルが日本政府の支援で建設されました。

17年、学生を中心にしたアチエの若者たちにより、マングローブ防災林植

危機に立つ水辺に豊かな命を再び

「おいしい、お肉焼けたよ」「エビ焼けたよ」。日本のキャンプ場でうれしい声がそこかしこに響きます。真っ赤になった木炭が、網の上に並んだ食材をおいしそうにあぶっています。

1990年代中盤、日本ではバブル経済がはじけ、物の豊かさから心の豊かさを求めるように、安価に楽しめる野外活動が活発になりました。オートキャンプ場の整備がなされ、人々は、家族連れで野外料理を楽しむようになりました。そんな中で木炭を使ったバーベキューが大人気でした。

ちょうどその頃、インドネシアで木材産業に携わっていた私は、帰国すれば子どもとキャンプ、出張しては木材の輸入という生活を続けていました。インドネシアで、おがくずから作る「オガ炭」のプラントを始めた会社や、また、タイガーシユリンプの養殖池を作るためにマングローブ林を伐採して木炭に変えることで一石二鳥の効果といった事業の展開を目にすることがになりました。

日本の里山で生産される黒炭・白炭の強敵は、中国炭や遠くアジアから運ばれてくる安価なマングローブ炭です。マングローブは海辺の手がすぐ届くところにあり、建築用資材や炭へと

変身させられました。

木材は、その扱いによっては持続可能な再生可能資源と位置付けられています。しかし需要と供給の商品経済のみの視点からの開発では、結局再生できない枯渇資源になってしまいます。

中国では、自国の森林を守るため、2004年から木炭の輸出を禁止し、03年から土壌流出防止策として退耕還林政策を全国展開しました。

日本では放置されたり切り捨て間伐されたりした里山林が、山崩れや土石流の被害を拡大しています。事態を改善するため、14年から、森林環境税を導入して里山整備へ向かっています。

世界的には、10年に生物多様性条約C O P 10の愛知宣言で、里山イニシアティブ(人間と自然環境との持続可能な結びつきを再生しよう)を採択し、多くの国々が、生活に隣接している里山の整備保全の必要性に気づき行動を始めています。

インドネシアでは、30年前には450万畝あったマングローブ林が、工業団地開発とエビを養殖し日本などへ輸出するための開発で250万畝に減少しました。04年12月26日に発生したスマトラ沖地震による津波では、防波となるべき沿岸マングローブ林が、

エビ養殖池、建築サポート材として伐採されていたせいで、被害が増大したとも考えられています。当時アチエの被災現場を訪れ、少し残っていたマングローブの大木にカニクイザルを発見し、命の交流の妙を感じたことを鮮明に憶えています。

昨年の第5回アジアユースサミット(A Y S 5)でマングローブ植林を計画したアチエの学生の発表を聞き、さらに第27回アジア国際ネットワークセミナーの環境と貧困部会で訴えられた内容をきっかけに、J A F Sではアチエへのマングローブ植林ワークを企画し赴きました。インドネシアで真摯に環境保全に取り組もうとしている若者たちと出会い、たくさんの方のエネルギーをいただきました。この経験を、もっともっと多くの人たちと分かち合いたいと思います。

緑豊かで、多様な命との交流に恵まれた未来を迎えるために、アチエのマングローブ植林プロジェクトを応援しましょう。「この指とまれ!」

(J A F Sスタッフ 永井博記)

植えたばかりの苗木(右)と5年経って大きく育ったマングローブ=1月11日、バンダ・アチエ、アルー・ナガ村



支援学校・孤児院に光を

米代にも足りない助成金 ビーチサンダルづくり学び 自立への道を踏み出す

取り残される農村地域

NGO「ウエラス・アシー（Weeras Ashi）支援学校」はインドネシア西ジャワ州マジャレンカ県の山麓にあります。イジャー・ハディジャー（Idjah Hadjah）さんが、1982年に設立したNGO「ウエラス・アシー孤児院」から独立し、88年に設立されました。現在、小・中・高校合わせて視覚や聴覚障害、自閉症、精神衰弱など支援が必要な男女62人が無料で通っています。

ウエラス・アシーは伝説に登場する「慈愛を常に持つ女性」の意味。支援学校で教える側は校長と教師11人、用務員1人。3代目校長のラエラ・プルヤティさんは、ハディジャーさんの義娘。校長の甥も教師で、先生と生徒、その家族が一同となって温かい環境づくりを目指しています。

ウエラス・アシー孤児院は、支援学校から500ほど離れたハディジャーさんの自宅2階にあり、離婚や外国への出稼ぎなどといった様々な事情を持つ家庭の女子中高生15人が、ここから公立学校へ通っています。75歳のハディジャーさんは元教師。「お母さん」と子どもたちに呼ばれて親しまれています。「お母さん」が食事を作り、片付けや洗濯などを子どもたちが分担しています。

インドネシアは近年、急速に経済が

成長する一方、首都圏と地方との経済格差が年々大きくなり続けています。マジャレンカ県の農村部も格差拡大の波に翻弄されて美しい風景を失い、多くの農民たちは格差拡大に対応できていません。

工科大学が支援活動費

一方、国の福祉政策は貧弱で、支援学校や孤児院には届かず、運営費の助成は1人1カ月6万5千ルピア（約650円）ですが、地方の屋台のラーメンは一杯約1万ルピア（約100円）。この助成金では米代にもなりません。また、栄養価の高いおかずも食卓に出せません。衣住人件費もなく、「お母さん」は自らの預金を切り崩し、15人分の食事を毎日作っているのです。

先生方の月給を40万ルピア（約4千円）に抑え、できるだけ教育費にあてています。家族や近隣住民の無償の協力で、先生方が教育現場にとどまっている状態です。

こうした中、2016年に国立バンドン工科大学の社会奉仕支援活動費を使ってビーチサンダルの生産訓練を継続するプログラムに1年間取り組みました。聴覚障害の生徒とその家族が製作に携わり、作業療法や応用的動作を訓練して手に職をつけます。個々の生徒の能力を最大限に引き出し、物を作

る喜びを感じてもらおうのが目的。生徒たちはスポンジを金型に合わせて切る、穴をあける、鼻緒をつける、シルクスクリーンでデザインを刷るなどの工程を学びました。製品販売で材料が購入でき、作業療法プログラムが維持できる体制づくりが目標で、生徒たちが職人に育つ可能性も秘めています。

無農薬野菜生産も計画

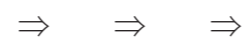
支援学校は一方で孤児院と共同で無農薬野菜の生産を計画し、農地の確保を始めています。生徒が食べる食材を育てることを通して農村部での自立を身に付け、できれば販売にも手を広げたいと意欲的です。全力で頑張る生徒たちの目は勉強できる喜びにあふれ、未来に向けて輝いています。

私がウエラス・アシー支援学校や孤児院と交流を持ったきっかけは、07年に井戸掘りに協力したことでした。その前年、中部ジャワでM6.3の地震が発生。私は、JAFSから中央ジャワ州の村に派遣され、村人たちと2か月半、寝食を共にしました。任務終了後、この国の大学院に通いながらジャカルタ駐在の方から預かった義援金の残りをこの支援学校に提供しました。支援学校やJAFSとのご縁は現在も継続中で、何らかの形で協力したいと思っています。

（在インドネシアJAFS会員
あない 孔井 美幸）



生徒たちがプレス機を使い、材料のスポンジを金型に合わせてビーチサンダルの形にカットする



聴覚障害の生徒たちが作業療法と職業訓練として、ビーチサンダルに絵の具で絵や文字を描く



完成したビーチサンダルを持つ生徒＝いずれも2月21日、ウエラス・アシー支援学校

学び「続ける」カンボジアの里子たち

現地からの報告 高卒後も大学進学を目指して

かつての内戦などで教育環境整備が遅れているカンボジア。JAFSAアジア里親の会は現地提携団体クメール・アジア友の会（KAFSA Khmer Asian Friendship Society）を通じ、貧しい家庭の子どもを里子として支援する初等教育普及支援事業を進めています。KAFSAが昨年11月、対象地域の一つタケオ州の里子10人へインタビュース、これまでの成果や今後の課題などをまとめました。概要を紹介します。（JAFSAスタッフ 横山浩平）

カンボジアの教育制度は6・3・3制で、義務教育は中学校卒業まで。18歳以下は、労働需要の多い縫製工場、建設現場などへの就職が禁止され、不法労働、児童労働の取り締まりが強化されています。しかし、家庭の経済状況などから、中学段階から中退する子どもも多くいます。

国は教育について、NO ONE LEFT BEHIND（誰も取り残さない）をテーマに、あらゆる子どもに機会を与え、教育格差を縮小し、指導内容を向上させることなどを掲げています。政府からの支援も増え、学校も貧しい子どもへの寄付を集めています。かつてより

改善されたものの、村や地域への支援の一つひとつを見ると、適切ではあるが規模が小さいため、大きな効果をおげているわけではありません。こうした状況の中、KAFSAは、成績優秀で学習意欲のある子どもを学校を通して選抜。自宅訪問して家族、子どもと面接し、里子を決めています。多くの子どもを抱え、教育負担が経済的に厳しい家庭が対象です。KAFSAが教材などを提供して適切に管理し、金銭的な援助は一切していません。教育プログラムでは、子どもの将来を考え、人材を育てる機会を提供しています。具体的には、文化遺産探訪のスタディツアー、シラミを駆除するヘアカットなどです。里子以外の生徒を含めた英語教室を開き、里子が他の子どもを誘って英語授業を受けるケース

JAFSAアジア里親の会が支援しているカンボジア、タケオ州の里子たち 2017年11月、



経済力が高まった結果、地域内での支出も増えています。また、女性の就業率、進学率の向上や出生率の低下にも貢献しています。今後の課題は、ニーズがあるがカバ

2 小学校の校舎建設にも協力 学ぶ環境を整え高校進学増える

JAFSAは会員さまのご支援を受けてKAFSAに協力し、カンボジア、タケオ州トレアン郡プレイスルック地区ソーチャン小学校に2005年、ロネアム地区ソピー小学校に10年にそれぞれ校舎を建設しました。

カンボジアの農村地域では1990年以降、出生率が上昇し（世帯当たり5〜6人）、小学校でも校舎が手狭になっていました。全生徒が毎日きちんと学校に通うことができず、中退の原因となっていました。

内戦であらゆる教育環境が破壊されたカンボジアでは、学校建設は急務であり、大きな課題でした。支援の必要性を国際機関に訴えていました。

ソーチャン小学校には、94年に村の寺の協力で建てられた校舎が2棟（10教室）ありましたが、老朽化により2教室を封鎖していました。あふれた子どもたちは、寺院の床下の教室で学ぶ

か、遠くの学校に通わざるを得ませんでした。親や先生は校舎1棟の増設を切望していました。

校舎建設費の10%に当たる土台の土代は、寺の呼びかけで村からお金が集められました。これを機に親たちは、学校の維持管理の寄付にも協力し、フエンスなどの建設も地域の寄付で賄われました。親の多くはポルポト時代に幼少期を過ごし、小学校3〜4年生までしか通っておらず、読み書きが満足ではありませんが、子どもの教育により関心を持つようになりました。

頑丈で安全な新校舎ができて、希望する生徒がみんな学校に通えるようになり、退学者も減りました。継続して高等教育を受ける意欲も高まり、完成から10数年経った今、中学校への進学率は70%（05年）から85〜98%（17年）、高校進学率も50%（05年）から85〜98%（17年）に上昇しました。

また、中学校の中退率の方が高校中退率よりも高いために、中学校入学から高校卒業までの支援の方が、中退率を減らせるかもしれません。

ソーチャン小学校新校舎と現在の様子 2017年11月



教育の普及は出生率低下をもたらした。貧困の悪循環が軽減されました。高校進学者が増えたことで、卒業後の就業の幅も広がりました。

現在この学校の貧しい生徒10名は、

があります。地域の委員会主催の植林や道路修繕などにも積極的に参加するようにになり、ボランティア精神の育成につながっています。KAFSAはワークキャンプ、リーダープログラムへの参加などの機会も提供しています。家庭が貧しいために親が子どもの早期結婚を期待する、といったことがあ

る中で、子どもたちが中退せずに教育を受け続け、高校卒業後に就業や進学ができるようにすることが目標です。支援を受けた子どものうち75%が高卒後、進学、就業しました。インタビュ

ーを受けた10人のうち8人が今年8月に高校を卒業します。残る2人も来年卒業予定です。100%ではありませんが、援助終了後、昼間働きながら夜間大学に通う子、幸運にも奨学金を受けて大学に行く子、大学に行くために出稼ぎしている子がいます。卒業生たちの間に進学して学び続けようという意欲や夢が、里親の支援によって広がったのではないだろうかと思えます。

卒業して就業している子どもたち全員が両親に仕送りしています。家庭の

JAFSAアジア里親の会の支援を受ける里子です。他に21名の最貧困層の生徒たちが国から支援を受けています。学校にPTAはなく、これまで村の寺が主な協力者でした。僧侶の呼びかけに応じる寄付は良き行いであると信じられていることで、学校への寄付が続いてきました。しかしこの伝統が途絶える心配があります。若い世代に仏教への信仰が弱まってきているからです。モラルも低下し始め、麻薬を使用する若者が増えてきました。

それでも現在のところは、JAFSA里親の会の支援に国からの補助金を加えて、校長先生を中心に学校の維持管理は適切に行われています。ソピー小学校では1970〜90年代に建てた校舎が生徒数が増えて手狭になり、老朽化も進んで危険な状況でした。新校舎の建設後、小学校の中退者が減り、中学校と高校への進学率も、それぞれ70%と50%（10年）から98%と90%（17年）に上昇しました。同時に地域の出生率も減少しました。

現在この学校も、JAFSAアジア里親の会から支援を受ける子が就学しています。また校舎建設費、維持管理費や教育費の一部には、寺の協力で村から集めた寄付金や国からの補助金を充てており、海外からの支援のみに頼らない自助努力もしています。親も教育により関心を持つようになりました。（JAFSAスタッフ 横山浩平）

JAFSはネパールで、1991年に現地の栄養調査を実施したのを機に栄養改善プロジェクトを始めました。給食と栄養指導を実施していますが、国としての食生活の指針はまだありません。

達成と

日本には、1945年から栄養士規則があり、現在は食生活の指針である食育基本法があります。「食」が生活の基本である、国全体で定めています。日本にいる私たちは、いろいろな場面で食生活の大切さを目にする機会が多く、自分の健康維持のためにどのような食生活を送ることが必要であるかを容易に学ぶことができます。しかし、世界を見渡すと、きちんとした指針がある国はとて少ないのです。

カーストの壁を越えて

日本では普通の食材である卵が、ネパールでは大変高価です。家の鶏が生む卵は食べません。孵化させて次の鶏を増やすために貴重だからです。農村の子どもたちが卵を口にできるのは年にほんの数回。肉や魚もお祭りのときだけでした。子どもたちの体格は小さく、10歳の子は、日本の子の6歳ぐらいにしか見えません。

その状況を知ったのがきっかけで、タライ地方のピトゥリ村の小学校で週一度、卵と牛乳の給食を始めました。

学校主導で給食をしているところは当時、ほかにありませんでした。子どもたちの間で給食当番を決めて運営しました。ネパールではカースト

による分業が主流で、父母から疑問の声も聞こえてきました。試行錯誤で続けてきました。今ではすっかり軌道に乗り、調理以外の仕事を子どもたち

がこなしています。

卵と牛乳の給食で子どもたちの栄養改善

現在は、卵と牛乳の給食の日以外にも、豆の日、ビスケットの日、雑穀の日など、毎日給食があり、卵と牛乳は、今も子どもたちにとって特別な日です。

給食だけでなく、

子どもたちと学校の先生たちに栄養学習をしています。食べる大切さ、食べ物に含まれる栄養がどのような役割を担っているかを知り、日々の食事への理解を深めて欲しいと願って指導しています。

給食を行って一番変わったのは、子どもたちが学校にきちんと通うようになったことです。加えて自主性が出てきました。体格も以前より少し良くなりました。子どもたちの栄養状態改善に、給食は欠かせません。子どもたち自身も給食を通じてその意味をきちんと理解し、自分たちの健康と将来を見据えるようになってきています。

経済的な理由で基本的な食材がなかなか手に入らない地域で栄養状況を改善するには、とても時間が必要であることを、20数年の活動を通して感じます。しかし、その中で改善されたことは本当に根付いた変化であることに実感しています。

お酒に「化けた」救援米

このほど、ネパールにはまだまだそ

の変化の入り口にも立つことができている地域がたくさんあることを、身をもって思い知らされました。

標高2000以上のところにあるタミ族の村を訪問しました。タミ族はネパールでも昔ながらの生活をかたくなに守っている民族の一つです。30歳代の女性であれば学校に通ったことがないことが普通。20歳前に全員が結婚します。20歳代前半の世代でようやく小学校卒業程度の勉強をした人たちの割合が増えますが、計算を何とかできる程度です。

その人たちの食事は、私がピトゥリ村で25年前に見た食事の状態でした。ただし、ピトゥリ村と大きく違ったのは、貧しいあまりそのような食事になっているのではなく、お酒（発酵酒）が一番で、食事はその次なのです。地震の被災者支援で配ったお米も、食べる前にお酒に姿を変えてしまったと、配布したNGOスタッフが残念そうに話してくれました。

食事は粗末そのもの。訪問したポドゥニマヤさん（43歳）は夫と7人の子どもの母親。

その日の食事は、ヒエの粉を練り炊きにしたものと、わずかなニンニクの葉と塩、唐辛子、山椒で味付けした水分が多すぎるスープのみでした。果物は月1〜2回、肉は月に3〜4回。ほぼ炭水化

課題と

物のみでカロリーをとり、わずかな野菜で何とかギリギリのビタミンをとっている状況です。8歳という子どもは、5〜6歳ぐら

ネパールの人々の食生活を見守って



ポドゥニマヤさん宅の食卓。ヒエの粉の練り炊きとニンニクの葉が少量入ったスープの粗末な食事＝ネパール、ドラカ郡のタミ族の村



スリーサンティ小学校の給食。卵と煮豆でタンパク質を摂取します＝ネパール、ノールパラシ郡ピトゥリ村

奥地に残る栄養足りない粗末な食事

いには見えません。栄養失調のせいでお腹だけがポッコリふくらんでいます。スキマヤさん（22歳）の娘は3

歳になったようですが、2歳ぐら

「変えたい」母らが訴え

母親たちから話を聞きました。「これでは子どもたちのためによくないとは思いますが。新しいことを知りたいですし、習いたいです」

国が違っても、親が子を思う気持ちは一緒です。でも、彼女たちは何を変えればいいのか、どう変えればいいのか分からないというのです。

「良くなるために変えたい」と思う気持ちはとても重要です。この気持ちがあれば、少しずつでも知識を得て、きつと今の状況から体の成育と健康を考えた食事に、変わっていくのではな

いかと期待を持ちました。私自身、管理栄養士の目線でネパールの食事事情を調査する機会を得たことから、現地の人々の生活状況を学び、そこから見えるものの重要性を切実に感じました。これまでの経験を生かし、すそ野を広げ、多くの人に伝えていくプロジェクトを実施することも、

私たちの役割だと考えます。

私たちの命は食べることで成

り立ちます。食べる大切さから「良い地域を作っていく」活動を展開できればと考えます。

(JAFSスタッフ 熱田典子)

サティ病院―開業 RUDYA代表 カシナート・デオガデ

インド中西部マハラシュトラ州ガッチロリ県の中心地から約65km離れた森林地帯に、ムスカ村（人口2285人、男性1365人、女性920人）は位置しています。

この村の女性の80%は読み書きができず、医療・衛生・健康に関する知識

や情報を持ちません。村人のほとんどが少数民族で霊媒師を崇拝しており、慣習的に医療アドバイスも霊媒師がしているため死に至るケースが出ています。行政から派遣された准看護助産師がいて、予防接種や看護が任務のほすですが、機能していませんでした。



①新しくできたサティ病院で、さっそく医師の診察を受ける村人たち、②サティ病院の開所式に集う村人たちと、村の様子=いずれも2017年12月23日、インド、ガッチロリ県ムスカ村



インド中西部の無医村に病院ができた

最も近い病院でも村から45km離れているため、適切な治療を迅速に受けられず、村内に病院が切望されていました。しかし、反政府極左系ゲリラ組織であるナクサライトが活発に活動する地域であり、公共施設の破壊活動を行っていたので、病院建設はできませんでした。また、このような僻地に協力してくれる医者もいませんでした。

2014年頃からナクサライトの活動が沈静化してきたので、JAFSはガッチロリ県での巡回診療をきっかけに、ムスカ村で健康増進プロジェクトを始めました。村人との話し合いにより、病院建設は難しいので簡単なことから進めることになり、まずは井戸を建設しました。健康自己管理カードを配布し、トイレ建設などを進めていくと、健康意識が向上するとともに、病院設立の気運がますます高まってきました。

16年2月、JAFSスタッフと現地提携団体RUDYA代表者、ムスカ村青年組合とが会合を持ちました。JAFSが病院運営費の40%を支援し、ムスカ村がインド政府に補助金を申請して村自体でも病院運営資金を得ることに合意し、病院設立に向けて動き出しました。

小学校旧校舎の一室を病院用に提供してもらうことでサティ(SATHI)病院の設立に至り、17年12月23日に晴れて開所式を行いました。SATHIは、健康増進を通して社会意識を育てる、という意味です。

月4回、ガッチロリ県中心地の病院から、医師のヘマンジ・マシャラム氏と、看護師1名を派遣してもらい、内科治療(風邪、下痢、マラリア、フィラリア、腸チフスなど)、簡単な外科治療(切傷、擦傷)、毒蛇の血清注射などを行える病院ができました。

病院の運営は、ムスカ村青年組合を中心とするサティ病院委員会が担います。代表者はダジャラト・モハート氏、局長にはグマワント・マルガエ氏を迎えました。彼らは学校の先生であり、村人から病院運営費を毎年集める役割を持っています。今後1年以内にインド政府へ病院運営支援を申請し、19年を目処に運営を自立化する予定です。

※健康自己管理カードとトイレは、JAFS第1エリア(大阪府と兵庫県北摂地域)からの寄贈です。

※サティ病院は、JAFS第1エリア、12月開催のアジアン・チャリティー・フェスティバル参加者の皆様のご支援、2017年度連合「愛のカンパ」助成を受けて設立されました。(翻訳と補足… JAFSスタッフ 横山浩平)

Muska said in her speech that SATHI means Companion as a companion RUDYA is with you so together we can make better & I hope it will be successful project. Mr. Narayanji Kolhatakar, senior member of rural health committee also Thanks to the Jafs and Rudya.

Mr. Dasharath Mohurle, Chairperson, Rural health committee, Muska, chair the programme and said before 15 years here was not education facilities, Muska village students were going to Angara village, passing river by boat, we united youth and started high school, now we have education facilities up to 10 standard and we also planning to start Junior college. we had not health facilities so we requested to Mr. Kashinath deogade sir & we must grateful to him, he lesion our request and behalf of Muska village people he requested to JAFS and he also brought JAFS people to see the village situation and today with help of JAFS and RUDYA we have health facilities also. I assured to Mr. Kashinath Deogade sir. Whenever you will call us we will be with you for a noble cause. Many respected people, Men and women were present in this programme.

Mr. Gumawant Margaye, Secretary, Rural Health committee Muska, Conducted the programme and Mr. Prakash Desai, Proposed Vote of thanks. All the Muska village people strove hard for the success of Programme.

SATHI Hospital- Inauguration

Kashinath Deogade
Executive Director, RUDYA (Rural & Urban Development Youth Association), Gadchiroli, India

Most awaited "SATHI Hospital" Inaugurated on 23December, 2017 at Muska Village. First of all we have given condolence to Let Mr. Moroti Gawade, who expired same day in night by heart attack, he was 52 of age. All Villagers was in sorrow & one side happiness of hospital opening. By taking in to confidence to the villagers we have inaugurated the hospital by lighting traditional lamp and cutting ribbon with the heads of chief guest. We welcomes to the entire guest by giving rose flower.

Mr. Kashinath D. Deogade, Executive Director, RUDYA, Gadchiroli has given introductory speech. He said, I am involved in your sorrow and pray to God for Let. Mr. Maroti Gawade's peace of soul. Today it is the historical time for Muska people, from long time you were requesting for the Hospital and because of JAFS; your dream comes in truth. We have selected your village to implement " Social Awareness Through Health Initiative" project and Its first step we have started hospital, this not only give you health service but it should be become the center of overall development. whatever you problems, you come to this center you will get problem solution, that is social, economic, educational, Health Judicial, employment etc, but I believe in people participation without your active participation it is not possible. He also said, today we planted one sampling in the farm of hospital now it is your duty to make it fruitful tree and for that your participation is must. It is not my hospital only it is your hospital also and it your responsibility to run it smoothly & successfully. I want to make clear that first Doctor will be available for twice in week & gradually we will appoint fulltime Doctor, now one Sister will work as fulltime and if any emergency, with consult of Doctor she will give the medicine and injection. First we will examine the response of people up to six month and take the new step with help of you & JAFS, JAPAN. He also congratulate to the villagers of Muska.

Mr. Dr. Hemaraj Masaram, Medical Officer, Rural Hospital Dhanora, Congratulate RUDYA & Muska Village people and Said, Muska Viillage is Situated in very remote area, here is not any health facilities but because of SATHI Hospital, problems of health will be solved. It is very great work done by RUDYA organization for you so you must take the benefit of this Hospital Mr. Dewangana Wasanik, police patil,

インド、パドラ小学校の子たちの里親になってください

インドにはJAFS日印友好学園が2校あります。そのうちの1校はマハラシュトラ州ガッチロリにあるパドラ小学校です。そこに通う子どもたちは、トライバルと言われる少数民族出身が多く、親たちは狩りや収穫による森からの恵みを主な収入源としています。彼らは森で暮らすための知恵をたくさん持っていますが、その分保守的でもあります。

インドの本会提携団体RUDYAの代表、カシナートさんは「教育によりこの地域の人たちの道が開けていきます」と熱意をもって彼らをサポートしています。

JAFSは、パドラ小学校の子どもたちがしっかりとした教育を継続して受けることができるよう、そして中学・高校と次のステップに進めるように就学支援をしています。少数民族の人たちの暮らしは簡単には向上しませんが、彼らが教育を受けることでゆっくりと変わっていくはずですが、そのためにも彼らの支援をしていただけましたら幸いです。

JAFSでは今年度パドラ小学校に通う子を支援していただける里親50名を募集しています。支援いただける方はJAFS事務局までご連絡をお願いします。

(JAFSスタッフ 熱田典子)



9月開校予定 低所得層の若者らに長期雇用の場を創出

JAFSは2月20日、インド南部、カルナタカ州バンガロール県北バンガロール地区バガール村に、低所得層の18歳から30歳までの若者を対象とする職業訓練学校の建設を始めました。このプロジェクトは、外務省の平成29年度日本NGO連携無償資金協力から3737万3202円の助成を受けています。

1月23日に外務省と契約を交わし、実行するに至りました。

この学校は、経済開発の著しいインドで、雇用需要があるにもかかわらず、低所得層の若者が長期雇用を得られないという課題を克服するためにつくりまします。

カリキュラムは、自動車工・機械工の基礎技術訓練とビジネスマナーの2つの分野で組まします。基礎技術訓練は、ライン生産現場で働けるぐらいの技術訓練、ビジネスマナー訓練は、あいさつに始まり、タイムマネージメント、コミュニケーションから服装に至るまでを学びます。JAFSは2014年から2年ほど、バンガロール県内の国内企業、在印日本企業を対象に必要な人材や訓練内容を調査し、このカリキュラムをつくりまします。

今後3年間に校舎を増設し、技術訓練やビジネスマナーだけでなく、サービスマナーやオファイス業務でも働けるカリキュラムをつくり、人材を育てる予定です。学校で研修を受けた生徒は、バンガロール県内の企業にインターンとして派遣し、長期雇用へとつなげまします。

学校建設はまだ始まったばかりで、土地は更地のままです。写真。これから本格的に建設に入ります。今年8月末に校舎を完成させて教材・機材を導入し、9月には学校の開校を予定しています。

(JAFSスタッフ 横山浩平)

南インドのHIV感染者へ薬・心・生活のサポートを



支援対象者に新聞の政策記事を読み聞かせるカウンセラー
＝インド、タミールナドゥ州ディンディガル県

12・13ページに紹介したインド・ムスカ村のサティ病院。無医村だった村の人々に、大きな安心が手に入ったことでしよう。特に子育てをしているお母さん方にとって、医療がすぐ近くにあることは、大きな心の支えになるでしょう。

私が属するJAFS第1エリアの会員も、みんなで頑張れば思いが届くという経験をさせていただきました。病

院設立支援の一助にと、日本のお祭りでチャリティ屋台を出し、寄付金作りにも励んだことが報われる瞬間は、何ものにも代えがたい経験として記憶に残ります。この病院が継続され、来年インド政府の支援が確定するまで、運営のお手伝いが必要です。引き続き皆さんとともに活動したいと思えます。

目を転じて同じインドの南、タミールナドゥ州ディンディガル県とナマカル県の農村地域に、やはり病と貧困に苦しむ人たちがいます。貧困ゆえに人々が故郷を離れたり、故郷と都市部を行き来する仕事に就いたりといったことが進展してきます。商品流通が盛んになり、昼夜問わず物資が輸送され、その運送に従事する人々と娯楽産業との接点で、HIV/AIDSが家庭や子どもの世界に蔓延する現実に向きまします。

インド政府では、HIVに対して早いうちから全国的な取り組みを行ってまします。1987年のエイズ政策策定、92年に全国エイズ対策プログラムを実施。そして90年代にはすでにHIV感染の高い危険性にさらされているハイリスク人口集団が特定され、それぞれの集団を集中的に対象にした対策が実施されました。輸血の安全性の強化は89年から行われ、HIV母子感染

予防は99年、抗レトロウイルス治療は

2004年に全国展開され、大きな成果をあげてまします。11年から12年の間に国内でカウンセリングと検査をすすめ、多くの感染者がさまざまなHIV関連プログラムの恩恵に浴しています。

一方農村地域では取り残しが起こらないように、地方分権的な対応で政策を進めてまします。NGOの関与を推進し、よりきめの細かな対応へ、より確実なサポートへと現実の改善が進められてまします。

この動きと連動しながら、この問題に長年携わってきた提携団体SSH (Society for Serving Humanity) は、政策が十分でない地域に対し活動してまします。心のサポート、啓発、教育支援、さらに経済的自立を支援するために職業訓練や養鶏、縫製、などの起業を助ける少額融資を行っています。

HIV/AIDS支援対象者へこのようなプログラムを行うため、特に子どもたちが学校に通えるよう制服・教科書代や学校の運営に支援をお願いまします。

「誰一人取り残さない」世界の実現に向けて、国際社会は歩んでいこうとしています。この動きに歩調を合わせる形で私たちも歩みを進めていきたいと思います。

(JAFSスタッフ 永井博記)

女性が働けるようになる

現金収入の少ない村で、男性は出稼ぎに出かけ女性が村を守っています。貧困から抜け出すため女性自助グループが生まれ、井戸の建設を要請しました。

生きていくためには水が必要です。1 kmも離れており、動物が水浴し糞尿するため池の水でも、生活用水として使用していたのです。この度寄贈いただいた新しい井戸によって、水くみの時間が大幅に短縮され、女性が働くことができるようになりました。



マハラシュトラ州アムラワティ県エクララ村
受益者…358名
井戸形式…ポンプ式(深さ140m)

【寄贈者】高野悠也様

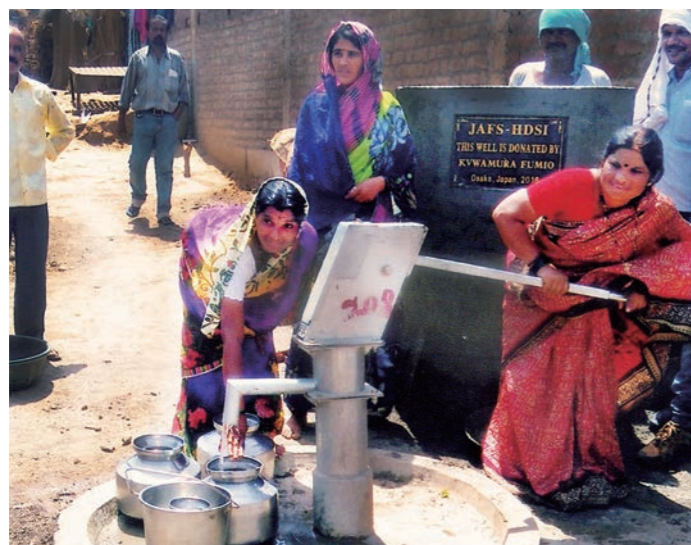
【寄贈者】栗村文雄様

女性自助グループが井戸を要請

少数民族や低カースト層の人が住む村です。農業や養鶏で生計を立てていますが現金収入が少なく、男性は出稼ぎに都会へ出ます。村には女性と高齢者が残り、経済は女性が自助グループを結成して問題を解決しています。

「命の水」が課題となり井戸の建設を要請しました。

今まで不衛生な水と水くみの重労働のため慢性的な疾患にかかっていましたが、この度の寄贈井戸により、やっと解決されます。心より感謝申し上げます。



マハラシュトラ州アムラワティ県ジャルカヒラプール 受益者…238名(44世帯)
井戸形式…ポンプ式(深さ140m)

きれいな水で生活も安定

この村の住民は60%が森の民として生きてきた少数民族です。収入源はマファの木からとれる果物・風邪シロップ・油や、はちみつ、竹からの収穫で生計を立てていますが、段々と収入が減り都市に出稼ぎに出るようになりました。村の井戸は乾季に干上がり1.5km離れた川まで水くみに行っていました。不衛生で病気になっていました。新しい井戸を自治体には長年作ってもらえませんでした。寄贈井戸のきれいな水により、病気も減り生活も安定し暮らしが上向いていきます。



マハラシュトラ州ガッチコロリ県マハワダ村
受益者…172名(52世帯)
井戸形式…ポンプ式(深さ60m)

【寄贈者】栗村寿子様

ご寄付には
税の優遇措置が
受けられます

なくそう貧困。命の水を！

井戸の寄贈にご協力ください。あなたの力がアジアの人々の命を助けます。ご寄贈者に完成報告書、写真、パネル写真を届け、現地の井戸に、ご寄贈者のネームプレートを設置します。

■井戸1基の建設に必要な費用■ (2018年4月現在)

インド=60万円 フィリピン=33万円
カンボジア=28万円 スリランカ=22万円
ネパール=17万円 (パイプライン=25~150万円)
バングラデシュ=浅井戸22万円、深井戸55万円

※5年間のメンテナンス費、現地管理費を含む概算です。※現地資材費高騰により費用を1割増に変更させていただきます。ご理解ご協力をお願いいたします。

■お振込み先■ ・郵便振替 00960-6-10835 アジア協会アジア友の会
・三菱東京UFJ銀行大阪中央支店 普通1968711 公益社団法人アジア協会アジア友の会

詳しくはアジア協会アジア友の会
06-6444-0587へ

安全で衛生的な水を確保できないアジアの地域に井戸ができて生活基盤が整い、自立へ一歩踏み出せるようになりました。ご寄贈くださったみなさまに感謝申し上げます。

みなさんのおかげで 井戸ができた村

自分たちで維持管理します

ほとんどが農民ですが自給農業のため現金収入はほぼなく、出稼ぎで現金を得ています。村にあった井戸は衛生的に管理されておらず、村人は1 km離れた安全な井戸まで毎朝夕水くみに出かけていました。水くみは重労働で時間をとるため、収入を得る仕事ができず、自力で井戸を作ることができていませんでした。

寄贈くださった井戸の建設には村人も参加して労働を分かち合い、深い交流が生まれました。井戸は受益者が維持管理しています。



ウバ州バドゥラ県スプリングバリー村
受益者…約275名(約35世帯)
井戸形式…露天式(深さ6m)

【寄贈者】木村文子様

【寄贈者】日本基督教団 松山教会様

井戸で生活が一新

村は自給農業のため現金収入が乏しく、鶏・豚の飼育やヤシ砂糖作りを副業とし出稼ぎにも行きます。生活用水は購入した水か、1.2km離れたため池の水でしたが、水くみは重労働で、動物も水浴する池の水は煮沸しないと使えません。子どもはそのまま飲むため下痢などの病気になり、より家計を圧迫しました。乾季には池の水も干上がりさらに遠くの池の水を利用していました。寄贈井戸によって近くで安全な水を手に入れることができるようになり、生活が一新します。



タケオ州トレアン郡トレベアン・ロンベアック村
受益者…48名(10世帯)
井戸形式…露天式(深さ16m)

学校に水が戻った

2015年の地震により水源が枯れてしまいました。水を得られる新たな水源が見つからずに、2年間水がないまま学校生活を送らなければならない状況でした。ようやく水源を定めることができ、貯水タンクを設置しました。そこから学校の水場までパイプラインをひき、子どもたちが毎日水を飲む状況になりました。水が出た瞬間、子どもたちはうれしさのあまり我先にと水を飲み、学校に水が戻ったことを大喜びしていました。



【寄贈者】西宮友の会様

シンドウパルチヨーク郡ボテシパ村チャンデソリ小中高等学校
 受益者：500名
 井戸形式：水道パイプライン

【寄贈者】日東電工グループ(Nittoグループ)様 手が洗える衛生的な学校



シンドウパルチヨーク郡ボテシパ村チャンデソリ小中高等学校
 受益者：500名 井戸形式：水道パイプライン

2015年の地震により水源が枯れてしまい、2年間水がないまま学校生活を送っていました。新しい水源より水をひくことができ、貯水タンクを設置して、学校へ水の供給ができるようになりました。小学校エリアの水場として、子どもたちの飲料水供給が円滑にできるようになりました。同時に、学校のトイレにも近く、子どもたちが衛生的に学校生活を送ることができる一助につながりました。

家の近くで水がくめる 【寄贈者】株式会社グローアップおかげ様クラブ様

水を求めて水ガメを掲げ、往復30分以上の時間をかけて水をくみ出かけるのが、この地域の人たちの毎日でした。近隣の地域に水場ができ、集落の近くで水が供給される様子をうらやましく眺め、この地域への供給を心待ちにしていました。

今回の共同水場ができたおかげで、女性たちは子どもを残して水くみに行かなくてもよくなった状況に、大変喜んでいきます。



シンドウパルチヨーク郡インドラワティGPバダレ村 受益者：200名(40世帯)
 井戸形式：水道パイプライン

女性自助グループの活動を後押し

人口約1500人。少数民族や低カースト層が住む村です。農業・畜産で暮らし、男性たちは季節労働者として出稼ぎに出ます。村を守る女性たちはこれまで、2kmも離れた井戸に水をくみに行っていました。JAFS提携団体のHDSIが村に女性の自助グループをつくり、子どもの教育支援などさまざまな啓発活動に取り組んでいます。地下水位が下がって井戸掘削に時間がかかりましたが、無事完成できました。女性たちが水くみ労働から解放され、村の経済活動などに専念できています。



【寄贈者】唐招提寺様

マハラシュトラ州アムラワティ県ダヒガオン村
 受益者：394名
 井戸形式：ポンプ式(深さ140m)

女性自助グループの活動を後押し

上のダヒガオン村と同様、少数民族や低カースト層が住む農業・畜産の村です。男たちは季節労働者として出稼ぎに出ます。村を守る女性たちはこれまで、1kmも離れた井戸に水をくみに行っていました。JAFS提携団体のHDSIが村に女性の自助グループをつくり、子どもの教育支援などの啓発活動に取り組んでいます。地下水位が下がって井戸掘削に時間がかかりましたが、無事完成できました。女性たちが水くみ労働から解放され、村の経済活動などに専念できています。



マハラシュトラ州アムラワティ県ワスニラジユルク村 受益者：464名
 井戸形式：ポンプ式(深さ140m)

【寄贈者】鵜飼 荘一郎様

【寄贈者】鵜飼 荘一郎様

念願の井戸で健康と衛生を改善

村は県の中心から東に45km離れた丘の森林地帯にあり、自転車や牛車を使い乗り継いでやっと着けます。約900人の村民の約60%が少数民族です。田や森に生えるマファの木の花や種の採取などで生計を立てています。2基あった井戸は夏には枯れてしまい、遠く離れた湖まで水をくみに行かねばなりません。水質も悪く、病気に悩まされていました。自治体に井戸建設を要請していましたが、良い返事をもらえませんでした。やっと念願がかなって、健康と衛生を改善できました。



マハラシュトラ州ガツチロリ県コレガオン村
 受益者：約250名
 井戸形式：ポンプ式(深さ60m)



熊本地震から2年

「忘れない」優しさこそ……

被災地という言葉聞くことが少なくなり、3月末で活動を終える団体やボランティアがほとんどです。2年前。「震度7が2度」「今までには余震の回数」と言われました。今までは益城町、西原村、南阿蘇村など以外では、もうすでに復興して終わったかのように思われています。それは仕方ない事で、熊本地震以降も日本各地で様々な災害が頻繁に起こり、次々と過去の出来事になっていくからです。しかし、被災した皆さんにとつては全く終わるどころではなく、先の見えない不安の中で日々の暮らしが続いています。その数も数千人単位です。地震後、すぐに避難所が開設され、「車中避難者」「テント避難者」などの言葉も生まれました。ボランティアからは「自立」が声高に叫ばれ、中には「阪神・淡路も経験した」「東北でも経験した」と、あたかも「私たちに任せておけば大丈夫」みたいなボランティアの人もおられました。

その反面、熊本の皆さんはとても気丈で、近隣の人々とこれからのことを話し合いながら、元気に日々を過ごしておられます。皆さん「仕方な

安永東仮設団地「みんなの家」で、商品とするコースターを作る被災者 3月2日、益城町

あ！」と思っているからです。今年3月末で終了するボランティア団体が多く、仮設住宅に来るボランティアさんもめっきり減っています。JAFSも3月末で終える予定でありました。しかし、益城町役場から継続の依頼もあり、また、人々の要望から始まった地元のお医者さんご夫妻による「お医者さんの健康相談」を支援していく必要もあり、継続していくことになりました。京都の企業からは血圧測定器を提供いただき、仮設の「みんなの家」へ設置しました。他の企業・組合・団体・個人からの色々な形での継続した支援を適切に仮設団地に届け、それぞれで支援を受けてもらえるような体制ができればと考えています。

仮設団地では、住宅を再建して退去する方、自力での再建を断念し復興公営住宅に期待する方、他に、農機具倉庫の建設を優先して個人住宅は後回しにし、倉庫や半壊の住宅に住み続ける方もいまだにいます。そんな中、継続の判断をし、アジア協会としても試練の3年目になると考えています。

皆さん、どうぞ、復興途中の熊本を見に来て下さい。そして、復興に向けて「がまだす」（がんばる）熊本の皆さんに会いに来て下さい。

東北も熊本も同じく、「忘れない優しさ」を皆様にお願いたします。

（JAFSスタッフ 山竹雄男）

【寄贈者】JAFS枚方地区会様

シンドウパルチョーク郡インドラワティGP
ネパネ村 受益者：187名（35世帯）
井戸形式：水道パイプライン



生活の変化が楽しみ

以前は水源が近くにありましたが、5年前に涸れた後は、隣の丘の水源を利用せざるを得ませんでした。しかし貯水できる設備がなく、必要最低限の水での生活でした。作物もトウモロコシ、ヒエ、豆しか育ちませんでした。今回のご支援により12,000ℓのタンクを設置し、水源の水を貯水して5集落に配水できるようになりました。水の苦勞が絶えなかった村が大きく変わるきっかけになり、農業の発展にも活用できると、村人たちは今後の生活の変化を楽しみにしています。

新天地の生活支える水 【寄贈者】NPO法人コンパストウキョウジャパン様

2015年の地震で元の集落の地層が悪いことがわかり、生活の場を移動することとなり、その新天地のエリアの水場として設置できました。生活の場を移動することには少なからず不安を抱えていますが、生活に欠かせない水が確保できたことで人々は不安を軽減できるだけでなく、生活設計できることにも繋がりました。今後の生活を支える水としてこの地の重要な水場となります。ご支援いただきましたおかげで不安が軽減できました。ありがとうございました。



シンドウパルチョーク郡インドラワティGPネパネ村 受益者：35名（6世帯）
井戸形式：水道パイプライン

【寄贈者】大安中学校テクニカルボランティア部様



シンドウパルチョーク郡インドラワティGPネパネ村
受益者：65名（12世帯） 井戸形式：水道パイプライン

蛇口から水が出た

以前は、水が流れてくる水脈があり、家畜の水場とするため池も作っていましたが、地震後その水が徐々に涸れ、全く水が無い状況になりました。そのため向かいの山の水源を使わせてもらいようやく生活していました。毎日水瓶を頭で背負い山道を登り降りしましたが、他に水を得る術はありませんでした。この度のご支援で自分たちの集落にて水を得ることができるようになりました。水が蛇口から出た瞬間の村の人々の顔は喜びにあふれていました。ありがとうございました。



国内外の様々なイベントをHPに載せています。記事についてのお問い合わせはJAFSへ。=裏表紙にアドレス、連絡先



人は「人材」でなく「人財」と痛感 支援した子たちの高い志がうれしい 命の水の井戸6基をカンボジアに贈ります

昨年10月10日に復活第1弾を開催したJAFS「社員クラブ」の第2弾が1月29日、大阪市天王寺区上本町、ホテルアウイーナのレストランカステロで、40数名が参加して開かれました。今回の卓話者は、当会社員会員でもあるラジオパーソナリティー&コメンテーターの末広真樹子さん。写真前列中央。「誰かのお役に立てる幸せ」をテーマに、パーソナリティー時代の思い出から、お店「天むす・すえひろ」での苦労話、そして、現在取り組んでいる社会貢献活動に至るまで、幅広い視点から語ってくださいました。その要約を誌上に再録します。(まとめ：JAFSスタッフ 柿島裕)

「社員クラブ」第2弾 末広真樹子さんが卓話

私は40歳のときに「天むす・すえひろ」という店を始めましたが、それまではタレント業しかしたことがありませんでした。きっかけは1970年の大阪万博のとき、私は同志社大学の英文科出身ですから、英語ができるだろうという理由でスカウトされました。タレントといっても、台本も指示もほとんどありませんでした。自分でスクリプトも書かないといけないという大変な仕事でした。でも、兵隊と一緒に、なんとか生き延びないといけないので、とにかく必死でした。特に取り

柄もない私がよくやってこれたなあと思います。

40歳でお店を始めましたが、これは多くの仲間たちと共同でやる仕事でしたので、ビジョンを皆にしつかり理解してもらう必要がありました。よく「人材」という言葉がありますが、人は材木ではなく宝なのだから「人財」というべきではないかと思っています。私は、この仕事を通じて、人は宝なりという思いを強くしました。

ところで私は一人っ子だったので、幼い頃はとても寂しい少女時代を送り

ました。ですから病気で学校に来られない少女がいると、その辛い気持ちかわかり、誰かの役に立ちたいという思いをずっと持ち続けておりました。あるとき、貧しくて学校へ行けないアジアの子どもたちを支援するインターナショナルスクールが軽井沢にできつつあることを知り、設立メンバーになりました。そして「貧しい子どもでも宝になれる」との思いから、2人の子どもの支援を始めました。1人は医者となつてタイの無医村で仕事をしたい、もう1人は政治家になつて国をよくしたい、と高い志を抱いています。とてもうれしく思っています。彼らのような子どもたちが種となつて飛んでいき、根となり木になり、やがて実となることを願っています。人生、苦勞の連続ですが、苦勞のあとには必ず喜びの花が咲くのです。今も、現役で仕事をしていますが、朝起きたときに誰かが役に立つことを待っているという思いがあれば、多少体調が悪くてもがんばれる気がします。死ぬまでその思いで生きていきたいです。

いと思っています。最近、会報誌「アジアネット」を読んで、1つの井戸で50人以上の命が救えると知り、とても感動しました。水のない生活がどれほど大変かは想像するに難くありません。まさに命の水を贈り続けているJAFSの活動はとても尊いと思っています。

そこで、今度、カンボジアへ井戸を6基寄贈したいと思っています。他人のお役に立てることはとてもうれしいことであり、決して押し付けではありません。でもせっかくなにか良いことをして知らせられないのは残念ですから、せめてテレビ局の方に取材してもらい、広く報道してもらいたいと思います。さ

らにSNSを通じてより多くの人たちにこの活動を知って欲しいのが私の願いです。※当日は、当会の理事で大阪カンボジア王国名誉領事館名誉領事の山田英男氏も参加しました。前ページの写真、真前列右。カンボジアへの井戸寄贈を、とても喜んでいました。

三重県いなべ市立大安中学に感謝状

JAFSがしているアジアへの井戸寄贈による飲料水供給事業のサポートには、幼稚園から大学までの学校の支援者が数多くいます。学生のアクションによって資金を得ている場合が多いのですが、中でも独自性のある活動によって資金を調達していたのが、三重県いなべ市立大安中学校のテクニカルボランティア部です。

彼らは地域の森から出る間伐材を利用し、椅子、机など木の味がよく出る方法でそれらを制作し販売。自らの地域環境を守ることからアジアの問題である衛生的な水を得ることが出来ない国の人たちがきれいな水を飲むことが出来るようにと井戸を寄贈してくれました。その合計が10基に達し、JAFSを代表して海外プロジェクトの大倉達也委員長が感謝状を贈りました。

今年この部長 須田恭丞君は、この活動をもっと多くの人に知ってもらいた

いと、「第21回ボランティア・スピリット・アワード」で活動を報告し、見事、表彰団体に選ばれました。彼は来年高考生になります。「この活動を通して贈った井戸を喜んで使っている人々の様子を見て私たちが大変うれしくなります。この活動を続けてきた意義を感じます。卒業しても何か続けていきたいと思っています」と、力強く語ってくれました。

残念ながらテクニカルボランティア部は2017年度で閉部になることが決まりました。これまでこのクラブを引っ張ってきた出口省吾先生は「子供たちが外の世界に目を向ける良い機会になっていたのにとっても残念」と話していました。しかし、地域の中で世界とのつながりを考えてこられた先生の思いは、この10基の井戸がアジアの各地域で人々の生活の輝きとなっているように、これまで指導を受けてきた部員たちの自信や人生の光の一つとなっているに違いないと、最後の部員の声を聞いて確信しました。

大安中学校テクニカルボランティア部の皆さん、ありがとうございました。アジアにこれまで贈ってくれた井戸は、これから先も現地の人々の生活を潤し、水を供給し続けます。

(JAFSスタッフ 熱田典子) ※大安中学校が贈った10基目の井戸は22ヶ所の「井戸ができた村」に掲載されています。



左から、出口省吾先生、須田恭丞君、大倉達也JAFS海外プロジェクト委員長。12月15日、JAFS事務局

間伐材から椅子・机をつくり アジアへ井戸10基寄贈を達成



アジアの音楽と食の融合だあ!

3月4日、今年も奈良県生駒市のセイセイビル内コミュニティセンターで、JAFS第7エリア「チャリティライブ生駒実行委員会」の主催で、第3回チャリティライブ生駒が盛大に開催されました。

回を増すごとに来場者数も増え、今年には250人を超えました。地元生駒の音楽演奏・歌・踊りなど11団体のステージは約3時間。その組み合わせの見事なこと。出演者は日頃のおけいこ

JAFS新年会、モンゴル民謡で盛り上がる



恒例の「JAFS新年会」が1月14日、大阪府高槻市の霊松寺で開かれました。

今年からは発足当初の「JAFS新年会」として開催することになりました。今回は、地元の三島高校のドイツ

人留学生も含めて55名が参加し、より広範な地域から人々が集まり、盛大な会となりました。JAFS事務局から、第1エリアが長年にわたって支援してきたインド、ムスリカ村の診療所が開設されたとの報告の後、三島高校が、昨夏参加したアジアユースサミットについて報告しました。

おいしい鍋料理に舌鼓を打ちながらのアトラクションは、モンゴル民謡を皮切りに、「おとひめアンサンブル」の合奏による全員の合唱や、元気いっぱい銭太鼓、馬頭琴の華麗な調べなど盛りだくさんのプログラムで、新春を皆で祝うことができました。

(JAFSスタッフ 柿島裕)

の成果を存分に発揮。拍手で盛り上がっていました。

JAFS会員の山田穂積さんが「アジアの人々の今」と題して作ったナレーション付き9分間ビデオを上映し、JAFSの活動を紹介しました。来年からはビデオ上映中は屋台も販売を止めて、全員で見る雰囲気づくりが好ましいと思います。

さて屋台はというと、和食、沖縄・ウイグル・モンゴル・フィリピンなどの料理、ケーキとドリンク、そしてカクテルも人気でした。最後はモンゴルの劉偉さんの歌、シルクロードローランのウイグル伝統舞踊や音楽で、華やかにお開き。

終了後に片づけ終わった会場で、ボランティアの皆さん、屋台出店の方たち、数か月にわたりライブ開催準備から会場設営と撤去作業まで見事なチームワークで納めた実行委員会の皆さんと、打ち上げの乾杯をしました。

第7エリアは、奈良県、和歌山県、三重県、八尾市、東大阪市の広域で、会員の輪を広げる活動を続けています。それぞれの得意を持ち寄り、楽しさも大変さも共有しながら、人のつながりを大切に、いいご縁に感謝です。素晴らしい地元ネットワークです。留学生はもとより、大勢との「多文化共生」をモットーに、アジア諸国のチャリティ活動をしていきます。

(JAFS理事 坂口久代)

何故あなたは存在するのか? 「自己を見詰めて対話すること教わる

第25回スリランカ講座が大阪市のJAFS事務局で2月24日にあり、おいしいスリランカ・カレーとともに、ジュエリー経営・デザイナー、ニラーニ盛岡さんのお話を聴きました。写真。大満足の日でした。

ニラーニさんは「何故あなたは存在するのか?」という難しいテーマをあげ、「自分を磨くこと」と明快に指摘して話しました。経済的・社会的な成功のみでは、必ずしも私たち人間は「幸せ」を得ることができないこと、

自己を知り(自知)、自己に目覚め、日々の生活の中で自分自身を見つめる習慣をもつことで、毎日、私たち自身の心の掃除をすることの重要性を説きました。自身の体験を踏まえて終始、寄り添って話してくれたことが印象的でした。

「具体的に、どうやって自己を見つめることができるのか?」といった積極的な質疑も交わされました。ニラーニさんはお風呂に入る時間を活用し、数年間かけて継続していったとのこと。自己に語りかけ自己と対話すること、一つ一つ過去から積もった心のひっかかりを捨て去っていくこと、と言葉を尽くして説明くださいました。

私たちは日々、多忙のなかで自己を見失ったまま日常に埋もれてしまい、「いま・ここに生きている」「存在している」ことに底光りしている深い幸せを忘れがちになっているのではないのでしょうか。毎日、思い悩み、不満や不安を唱えがちなとき、短い時間でもいいので「自己を見つめる」ことを日々実践していくことで、周囲の人との接し方も改善していくかもしれません。そのようなことを、今回のニラーニさんは教えて下さったと思います。

(JAFS会員 横山泰三)



大阪・河内長野にアジア友の会が発足

「河内長野アジア友の会」発会式が1月20日、大阪府・河内長野市立文化会館(ラブリールホール)ホワイエで開催されました。従来の地区活動を発展・強化させ、地域がより主体となって活動する組織として立ち上げようという狙いで、河内長野はそのモデルケースとして発足しました。

当日は、JAFS会員だけでなく、地域の皆さんに広く参加いただき、会

場はほぼ満席の70名を超える方々で埋まりました。

淀川キリスト教病院院長の渡辺直也先生による記念講演「知っておきたい医療の『どう』『こう』超高齢社会にむけて」を皮切りに、発会セレモニー、記念公演へと続きました。

発会セレモニーでは、白井春夫・河内長野アジア友の会会長の挨拶の後、新谷百代・同会事務局長による設立の主旨説明、そして西野修平・大阪府議会議員を筆頭に、来賓として桂聖・河内長野市議会議員、堀川和彦・同議会議員、飯阪保・河内長野街道ロータリークラブ副会長から祝辞をいただきました。

河内長野市の清教学園はJAFSに最初の井戸を寄贈した法人です。その担当者であった飯阪氏が当時のことを語り、河内長野と当会の深い関係に思いをはせることができました。

第3部の記念公演は、地元河内連による威勢の良い「よさこい」から、子どもたちの優雅で愛嬌もたつぷりのフラダンス、カルラ・アジアダンススタジオのメンバーによるエキゾチックなインド舞踊。写真と、河内長野の素晴らしい芸能を満喫することができました。

3月25日には第1回例会を開き、今後は地域の顔の一つとして活動を続けてまいります。

(JAFSスタッフ 柿島裕)

斬新なアイデアで数々のソフトウェアを創出



当社は婚礼宴会業務支援システムを他社に先駆けて開発提供し、シテイホテル・結婚式場をターゲットに顧客との対話を積み重ね、高い技術力と豊かな感性をもって進化してきました。

創業当初から26年以上にわたり、自社パッケージ製品の開発・直販にこだわるのは、お客様のシステムが稼動する

までの業務ヒアリングから設計・開発、さらに導入後の保守など、上流から下流までの全工程を自分たちで行うことで、仕事に誇りと責任をもつことができると考えているからです。

お客様の課題を共有し、ソリューションを提供しながら共に乗り越えるまでお付き合いする。そうやってビジネスを成功させる達成感や喜びを共に味わい、社員・企業も成長・発展し、社会貢献を通して他者とともに「成幸者」であることを目指していきます。

大阪市中央区大手通1丁目1-2
 ☎ 06-6943-4560
 代表取締役：中野恵司
 担当者：総務部 村上佳香

新・The 社会貢献

企業や労働組合、各種団体は、それぞれの理念に基づいて活動していますが、いろいろな形で社会の役に立ちたいという気持ちは私たちと同じです。アジア協会アジア友の会の理念にご賛同、ご協力くださっている法人会員を紹介します。

ハラール食品を広く日本のみなさんに販売



弊社は、マレーシアやインドネシアのハラール食品（イスラム教の戒律によって食べることが許された食品）を輸入し、イスラム教徒の留学生や、アジア料理の好きな日本人向けに販売をしている会社です。

京都では「ぶんがらや」（マレー語で「ハイビスカス」の意味）というマレーシアレストラン

◆マレーシア・ハラール・レストラン
 「ぶんがらや」
 (店長：ライリー)
 京都市右京区太秦桂ヶ原町1番地1
 TEL: 075-862-6024

ア料理店もやっており、多くの在日マレーシア人の方々の集う場ともなっています。写真。皆さんに美味しいインドネシアやマレーシアの食文化を紹介していきたいと思っております。どうぞよろしくお願ひします。

岐阜県大垣市川口4-869-2
 ☎ 0584-89-4924
 代表：春日井勝範

●環境コラム●

平昌オリンピック・パラリンピックの熱戦が終わりました。百花繚乱、金銀銅色に限らず皆さんの色々な花が輝かしく咲き乱れました。簡単に咲いたわけではない花だからその輝きでした。

さて次は2年後の2020年夏、東京オリンピック・パラリンピックです。ここで金銀銅に輝く選手に授与されるメダルを、全国から集めるリサイクル金属で作る「都市鉱山からつくる！みんなのメダルプロジェクト」。使わなくなった携帯電話等の小型家電をリサイクルしてメダルを作る、国民参加型プロジェクトです。国民みんなでメダルを作っておもてなしですね。そして未来の持続可能な循環型社会への一歩です。

携帯電話等の小型家電には、金、銀、白金、パラジウムなどの有用金属が使われています。使わなくなっても家に眠っていることの多い小型家電は、掘り起こせば有用金属の出でくる鉱山の様ということです。「都市鉱山」と言われています。小型家電1台に含まれる金属が極少量のため、経済性の高いリサイクルは難しく、採算が合う技術やシステムは発展途上です。これに弾みをつけるためのメダルプロジェクトでもあるでしょう。東京オリンピック・パラリンピックで

リサイクル金メダル

必要な金銀銅メダルは約5000個のこと。これはいったい都市鉱山をどれくらい掘れば作れるのでしょうか？携帯電話でいうと2000万台分とのこと。都市鉱山を結構掘る必要がありますね。

2013年から「小型家電リサイクル法」で回収が始まっていますが、今年4月からはメダルプロジェクトのための小型家電回収が始まります。メダル作りに参加しよう！という方は各自自治体のお知らせを見てみてください。

オリンピックに先駆けて、山口県下関市、北九州市、京都市など各地のマラソン大会で、既にリサイクル金メダルが使われ始めています。

またメダル以外に、リサイクル金の新しい使い道として、京都で興味深い取り組みが始まっています。それは祇園祭。今夏の祇園祭の終了後から、山鉦の金装飾の修繕や新調に、使用済み小型家電からのリサイクル金を使う計画が進められています。いずれも、北九州市の金属会社のリサイクル技術が用いられています。

金属に限らず紙でもプラスチックでも何でも、リサイクルされた再生品が活用されないことには、リ(再)サイクル(輪)循環の輪がぐるぐる回りません。リサイクル金をメダルに使うのと同様、再生紙や再生プラスチック品を選んで買って使うのも、リサイクルへの貢献です。(JAFSスタッフ 川本裕子)

「協力スタッフ」募集

本会では「協力スタッフ」の制度を設けております。年齢は問いません。詳しくは、事務局までお問い合わせください。

TEL: 06-6444-0587
 FAX: 06-6444-0581
 E-mail: asia@jafs.or.jp

入会のご案内

皆さまが会員となつてサポートして下さることで、安定した活動計画ができます。継続した活動をしていくためにも、ご協力をお願いいたします。

- A. 維持会費 年額1口 12,000円 (月額1,000円)
 - B. 賛助会費 年額1口 6,000円 (月額600円=振込手数料含む)
 - C. ジュニア会費 (高校生まで) 年額1口 1,000円
 - D. 団体会費 年額1口 20,000円
 - E. 法人賛助会費 年額1口 50,000円
- 会費・寄付の振り込み先
 郵便振込
 00960-6-10835 アジア協会アジア友の会

編集後記

世界99カ国の講師と話せるオンラインの英会話を始めました。1日25分。米国帰りの孫に習って始めた古希の手習いです。(敏)

あ の東京五輪、男子1万円で3周遅れたスリランカ選手に満場の声援。あの温かさ2年後も「メダル大国日本」への傾斜強まる今、自戒を込めて。(誓)

さ あ、春ですよ、あったかくなってきました、皆さんのあったかいで支援お願いいたします。ほんと、恵まれない子ども達のために。(金)

道 具の改善を含め人の技の戦いという視点で五輪観戦すると、どこまで進化していけるかが楽しみです。文字と写真で人に伝える技もさりかな。(博)

3 月初めにJAFS事務所の模様替えが行われました。ちょっと広く明るくなりました。エレベーターを降りて最初に目にする景色も変わりましたよ！(和)

未 広さんが社員クラブで話された「人財」は、JAFSの理念「誰もが生まれてきてよかったと思える社会の創造」そのもので大いに共感しました。(裕)

息 子の卒業式。体育館に並ぶ生徒一人一人に家族・先生や地域の尽力があり、人を育てることに日本社会の多くの支えがあるのだと改めて感じました。(川)



▲「ぼくの仲良しさん」今日も
 おいしい牛乳ごちそうさま!!
 2018年2月28日、ネパール、
 シンドウパルチョーク郡インドラ
 ワテイ村



募金にご協力をお願いします

アジアの安全な飲料水がない地域で
 貧困に苦しむ人たちを支援する活動に使われます

郵便振替 00960-6-10835 アジア協会アジア友の会

編集・発行：公益社団法人 アジア協会アジア友の会

〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-2-14 肥後橋官報ビル5階

☎ 06-6444-0587 FAX 06-6444-0581

URL : <http://jafs.or.jp> E-mail : asia@jafs.or.jp

2018年4月 133号 発行人：萩尾千里 編集人：村上公彦

広報企画委員長：法花敏郎

編集アドバイザー：松本 督、黒沢雅善

編集スタッフ：岩崎準一、大本和子、柿島裕、金井英夫

川本裕子、永井博記

印刷製本：あさひ高速印刷株式会社



◀表紙の写真 マングローブ（オオバヒル
 ギ）の苗を植栽地へ手渡しリレー!! 2018
 年1月11日、インドネシア、バンダアチエ、
 アル・ナガ村。4〜7ページに特集記事